中臣清麻呂朝臣宅宴席歌考

――〈梅〉解釈を巡って――

長見菜子

はじめに

『万葉集』巻二十末部に、「二月に、式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅にして宴する歌十首」と題された歌群はある。[注1] 一般的に「中臣清麻呂の自宅に親しい人物らが集い、清麻呂を寿ぐ宴を開いた」と解釈されているが、これら十首を細かく見ると、所々に不可解な点がある。

特に歌群でしばしば取り上げられる〈梅〉が、〈散り過ぐる〉あるいは〈咲き散る〉と、歌によって異なる様子であることに疑問を覚える。〈散り過ぐる〉とは、一般的に花が完全に散り終わり緑一色になった状態を指す。[注2] 対して〈咲き散る〉は、花が完全に散り終わってはいないことを表している。[注3]

即ちこの場において詠まれる梅は、一方は散り果てた梅、他方は散りゆく過程にある梅であり、情景が一致していない。そこで本稿では〈梅〉に焦点を当て、従来とは異なる観点よりこの歌群を検討する。

一　二種類の〈梅〉

まず、話題となる十首を「新編日本古典文学全集」『萬葉集』から引用する。[注4]「新編日本古典文学全集」では「十五首」と括られているが、本稿では「興に依り、各高円の離宮処を思ひて作る歌五首」を除く四四九六番歌から四五〇五番歌までを取り上げる。なお、以後の万葉歌の引用は全て「新編日本古典文学全集」『萬葉集』からとする。

二月に、式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅にして宴する歌十五首

恨めしく　君はもあるか　やどの梅の　散り過ぐるまで見しめずありける

右の一首、治部少輔大原今城真人（巻二十・四四九六）

見むと言はば　否と言はめや　梅の花　散り過ぐるまで君が来まさぬ

右の一首、主人中臣清麻呂朝臣　（巻二十・四四九七）

はしきよし　今日の主人は　磯松の　常にいまさね　今も見るごと

右の一首、右中弁大伴宿禰家持　（巻二十・四四九八）

我が背子し　かくし聞こさば　天地の　神を乞ひ禱み　長くとそ思ふ

右の一首、主人中臣清麻呂朝臣　（巻二十・四四九九）

梅の花　香をかぐはしみ　遠けども　心もしのに　君をしそ思ふ

右の一首、治部大輔市原王　（巻二十・四五〇〇）

八千種の　花はうつろふ　常盤なる　松のさ枝を　我は結ばな

右の一首、右中弁大伴宿禰家持　（巻二十・四五〇一）

梅の花　咲き散る春の　長き日を　見れども飽かぬ　磯にもあるかも

右の一首、大蔵大輔甘南備伊香真人　（巻二十・四五〇二）

君が家の　池の白波　磯に寄せ　しばしば見とも　飽かむ君かも

右の一首、右中弁大伴宿禰家持　（巻二十・四五〇三）

愛しと　我が思ふ君は　いや日異に　来ませ我が背子　絶ゆる日なしに

右の一首、主人中臣清麻呂朝臣　（巻二十・四五〇四）

磯の裏に　常夜日来住む　鴛鴦の　惜しき我が身は　君がまにまに

右の一首、治部少輔大原今城真人（巻二十・四五〇五）

宴は天平宝字二年（七五八）二月に催された。伊藤博氏は、大原今城が取り仕切った「清麻呂の誕生日の寿の祝い」であったと推定している。[注5]

和歌における〈梅〉の様相を確認する。十首のうち、四四九六・四四九七・四五〇〇・四五〇二番の四首が梅を句内に含む。「新編日本古典文学全集」の意訳をふまえてこの四首を通読したい。冒頭四四九六番歌で大原今城が「ひどい人であなたはあるよ。お庭の梅が散り果てるまで、見せてくださらなかった」と中臣清麻呂をなじり、清麻呂が四四九七番歌で「見たいとおっしゃったら、なんでいやと申しましょうか。梅の花が散り果てるまで、あなたが来られなかっただけです。」と対応する。

四五〇〇番歌で市原王が「梅の花の香りが慕わしさに、遠く離れていますが、心は絶えずあなたを思っております。」と清麻呂を褒め、家持の歌を挟み四五〇二番歌で甘南備伊香が「梅の花がちらほら散る春の、長い日ずっと見ても飽きない、お庭の磯ですなあ。」と追従する。

宴が催された日付は、旧暦二月一日から九日の間、太陽暦の三月十四日から二十二日に該当する。伊藤博氏は「いきなり梅の散りすぎたことを話題にするのと合っている」とし、「新編日本古典文学全集」『萬葉集』も同様の解釈をとっている。[注6] しかし実際には、和歌によって梅の描写には齟齬がある。それに

も関わらず、この相違点を説明した注釈書は見受けられない。

〈梅〉を含む万葉歌は一一八首あり、全てが〈女性の喩えとして用いられた梅〉もしくは〈植物の梅（擬人化を含む）〉に分類できた。そのうち梅が植物を指しており、加えて詳細な日時が記載されているものは、当該歌群を除くと巻五「梅花歌卅二首」、巻十七「大宰の時の梅花に追和する新しき歌六首」、そして巻十九「二月二日に、守の館に会集し宴して作る歌一首」の三群が該当する。まず、「梅花歌卅二首」歌群の序文を挙げる。

天平二年正月十三日に、帥老の宅に萃まりて、宴会を申べたり。時に、初春の令月にして、気淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。加似（しかのみにあらず）、曙の嶺に雲移り、松は羅（うすもの）を掛けて蓋を傾け、夕の岫（くき）に露結び、鳥は穀（うすもの）に封（と）ぢられて林に迷ふ。庭に新蝶舞ひ、空には故雁帰る。…

「帥」は「大宰帥」、「老」は当時大宰帥に就任していた「大伴旅人」を指す。大宰府に赴任中、吉田宜に宛て贈った歌群である。[注7] 題詞によれば、旧暦正月十三日は梅花が見ごろを迎えていたとみえるが、「梅花歌卅二首」の一首、八二三番歌には「梅の花　散らくはいづく　しかすがに　この城の山に　雪は降りつつ」とあることから、落梅の時期ではなかったとも考えられる。[注8] しかし多くの官僚の歌が残っているため、咲く梅を愛でる宴自体が虚構であったとは言い難い。以上を考慮して、天平二年（七三〇）正月十三日の大宰府は、梅がほころび、咲き始める時期であったと解釈したい。

次に巻十七「大宰の時の梅花に追和する新しき歌六首」を見る。左注には「右、十二年十二月九日に、大伴宿禰書持作る。」とあるが、この日は陽暦の翌年一月初旬に該当し、空想的作品である可能性が高く参考にはしない。最後に、巻一九「二月二日に、守の館に会集し宴して作る歌一首」を検討する。

二月二日に、守の館に会集し宴して作る歌一首

君が行き　もし久にあらば　梅柳　誰と共にか　我がかづらかむ

右、判官久米朝臣広縄、正税帳を以て、京師に入るべし。仍りて守大伴宿禰家持この歌を作る。ただし、越中の風土に、梅花柳絮三月にして初めて咲くのみ。

（巻十九・四二三八）

大伴家持が越中に赴任している最中、部下の久米広縄が上京したのを機に創作した歌である。この年の二月二日は陽暦三月七日にあたるという。[注9] なお左注に「ただし、越中の風土に、梅花柳絮三月にして初めて咲くのみ。」とあるのに注意したい。越中では旧暦三月に「ようやく梅の花が開花する」と注記しており、この時点ではまだ梅は咲いていない。旧暦三月は、太陽暦においてはおおよそ四月に相当する。

以上の情報を用いて、梅の開花時期を検討する。大宰府では

旧暦正月十三日の時点で咲き始めていたとすれば、満開になるのは数週間後の旧暦正月末である。すぐ散る桜と異なり、梅は開花した日時より一ヵ月近く咲き続ける。陽暦に換算すれば、二月上旬から三月上旬にかけて咲くと推測できる。

対して越中では、「開花時期は（旧暦）三月」とある通り、相当遅れた時分に花が開き始めるため、気候条件によっては陽暦で四月の終わり頃まで咲くこともありうる。奈良時代の大宰府と越中においては、多少の誤差を加味しても梅の開花時期に約二ヶ月程度の地域差があったと思われる。奈良時代の開花時期は現代と大差ないといえる。[注10]

以上の内容を考慮して、再度当該歌群を検討する。四四九六・四四九七番歌は〈梅が散り過ぎる〉と、梅の花が散り果てた状態を表している。しかし四五〇〇番・四五〇二番歌は散り終わったはずの梅を持ち出し、その風情や香りを讃えている。

宴が催された旧暦二月一日から九日、即ち陽暦三月十四日から二十二日は、三月中旬に相当する。梅の散り時ではあるが、花が開いてから散り終わるまで約一ヵ月あることを考慮すれば、四四九六・四四九七番歌のような〈梅が完全に散り終わった〉状況だとは断言できない時分なのではないか。例えば期日のうち最も早い旧暦二月一日に催されたとすると、その日は陽暦三月十四日に相当する。恒常的な気候であれば、梅の花が咲いていた可能性は十分にありうる。

対して四五〇二番歌が清麻呂邸の庭に生育する梅を詠んだ歌であるのは内容からして明瞭であり、〈植物の梅〉の様子、そして当時の開花状況を示すものとして蓋然性がある。四四九六番歌、四四九七番歌を「梅が散り果てた」と解釈している注釈書でも、四五〇二番歌の梅に関しては「咲いている」と見なしているため、七五八年旧暦二月上旬、または陽暦三月中旬の奈良は、〈梅が咲き誇る〉状況であったと解釈するのが順当ではないだろうか。

ここで『万葉集』にある〈咲き散る〉または〈散り過ぐ〉を含む和歌を精査し、詠まれる梅の状態をより具体的に分析したい。『万葉集』には〈咲き散（る）〉を含む歌、〈散りす（ぐ）〉を含む歌は多々あるが、その中でも特徴的なものを挙げて考察する。[注11]まず〈咲き散る〉だが、例として八四一番歌、一九〇〇番歌、三一二九番歌を挙げる。

うぐいすの　音聞くなへに　梅の花　我家の園に　咲きて散る見ゆ　（巻五・八四一）

梅の花　咲き散る園に　我行かむ　君が使ひを　片待ちがてり　（巻十・一九〇〇）

桜花　咲きかも散ると　見るまでに　誰かもここに　見えて散り行く　（巻十二・三一二九）

八四一番歌は「梅花歌卅二首」のうちの一首であり、〈見頃の梅を鑑賞する〉という趣旨のもと詠まれている。即ちこの〈咲き散る〉は、花が咲き誇る様子を表した一例である。一九〇〇番歌は、歌意のみでは梅の状態を推し量ることは難しい。

しかし第五句の原文は「片待香花光」と表記されており、作者が梅の花が照り輝いた状況を想定して創作した可能性が高いと思われる。[注12] 三一二九番歌は、人の往来を桜花が咲き散る様子に喩えている。第五句に「見えて散りゆく」とあるので、桜が花開き散っていく一連の過程を重ねていることが分かる。

次に〈散り過ぐ〉を含む歌を見る。例として一四八九番歌、二二八六番歌、三三三三三番歌、四三九五番歌を挙げる。

大伴家持が橘の花を惜しむ歌一首

我がやどの　花橘は　散り過ぎて　玉に貫くべく　実になりにけり

（巻八・一四八九）

我がやどに　咲きし秋萩　散り過ぎて　実になるまでに

（巻十・二二八六）

君に逢はぬかも

大君の　命恐み　あきづ島　大和を過ぎて　大伴の　三津の浜辺ゆ　大船に　ま梶しじ貫き　朝なぎに　水手の声しつつ　夕なぎに　梶の音しつつ　行きし君　いつ来ますむと　大占置きて　斎ひ渡るに　狂言か　人の言ひつる　我が心　筑紫の山の　もみち葉の　散り過ぎにきと　君がただかを

（巻十三・三三三三三）

独り竜田山の桜花を惜しむ歌一首

竜田山　見つつ越え来し　桜花　散りか過ぎなむ　我が帰るとに

（巻二十・四三九五）

一四八九番歌・二二八六番歌は、花が散り果てて実が生った状態を詠んでいる。三三三三三番歌は挽歌であり、人が身罷った様を紅葉が散ることに喩えている。亡くなったことを表すために、〈散り過ぐ〉を用いているのが注目される。四三九五番歌は、山を越える道中は満開であった桜が、帰る時にはすっかり散り終わっている状態を対比表現した歌である。

以上に鑑みると、〈咲き散る〉と〈散り過ぐ〉には明確に違いがあることが分かる。〈咲き散る〉は、散った花・咲き誇る花が混在する見ごろの状態を、〈散り過ぐ〉は花弁がすべて散り実が生っているといった、旬を完全に過ぎた状態を表しているといえる。〈咲き散る〉が〈散り果てる〉と解釈されたものも中にはあるが、それは完了や過去を表す助動詞と共に用いられたもので、四五〇二番歌はその例に該当しない。

背景の異なる二つの表現が見られるのが、当該歌群における一番の問題である。庭の梅花が例のように〈散り過ぎた〉と称される状態であったなら、新芽が芽吹いた木ばかりとなり、梅の花を鑑賞するどころではない。四五〇二番歌で、庭に咲く梅とのどかな春を対称にしているのをみても、状況は嚙み合っておらず、当時の中臣清麻呂宅には、〈散り終わった梅〉と〈散る渦中の梅〉の二種が存在するように思われる。

梅は時に〈女性の比喩〉として用いられることを先述したが、筆者は四四九六・四四九七番歌の〈梅の花〉は彼の娘を指していると推察する。以前、拙論「花かつみ考」において中臣女郎の和歌を取り上げた際、終章で清麻呂の娘である可能性に触れた。[注13] また清麻呂に娘がいたことは『尊卑分脈』に記載があり、[注14]

梅が娘を指すことは十分に考えうる。以下、その根拠を確認する。〈梅の花〉を女性に喩える事例は『万葉集』に多い。加えて〈梅の花が咲いて散った〉という表現は、女性が男性と関係を持った暗喩として使用される。

大伴宿禰駿河麻呂の梅の歌一首

梅の花　咲きて散りぬと　人は言へど　我が標結ひし　枝ならめやも　（巻三・四〇〇）

この歌は、作者が目をつけていた女性が成人し人妻となったことを示唆しており、四四九六・四四九七番歌の構図とも似ている。『万葉集』にはこのような例が散見されるにも関わらず、なぜ当該宴歌群の梅は〈植物の梅〉であると断定されていたのか。娘の存在が周知でなかったことが主だろうが、一つは清麻呂の庭園を讃える内容が歌群に含まれていたからだと思われる。

また〈やど〉と共に詠まれた植物が間接的に女性を指す例は『万葉集』に数例ある。一部を以下に記す。

山部宿禰赤人が歌一首

我がやどに　韓藍蒔き生ほし　枯れぬとも　懲りずてまたも　蒔かむとぞ思ふ　（巻三・三八四）

大伴坂上郎女の橘の歌一首

橘を　やどに植ゑ生ほし　立ちて居て　後に悔ゆとも　験あらめやも　（巻三・四一〇）

我がやどに　生ふる土針　心ゆも　思はぬ人の　衣に摺らゆな　（巻七・一三三八）

我妹子が　やどの秋萩　花よりは　実になりてこそ　恋増さりけれ　（巻七・一三六五）

我がやどに　植ゑ生ほしたる　秋萩を　誰か標刺す　我に知らえず　（巻十・二一一四）

三八四番歌は譬喩歌である一三六二番歌と類似しており、一三六二番歌と同じく、韓藍が女性を表すと指摘されている。[注15] 四一〇番歌は作者の大伴坂上郎女が、自分の娘を橘に仮託し、庇護対象として気をもむ様子を歌にしている。一三三八番歌も同様である。一三六五番歌は植物の秋萩と妻を二重にとり、花が咲いている時（恋人の時分）よりも実になって（妻と結婚して）からの方が幸せだと詠っている。二一一四番歌は秋萩が女性の暗喩となっている。

〈やどの梅〉が植物の梅だという解釈は、四五〇二番歌から推察され固定化したものと考えられる。だが上記のように女性が植物の梅に仮託されている例があることから、必ずしも〈やどの梅〉を四五〇二番歌と同様に解釈する必要はない。更に当該歌群では一貫して、清麻呂宅の庭を〈磯〉と表記している点も留意すべきである。

ところで、この宴席歌群と類似性があると思われる歌群に、巻四「大伴家持、藤原朝臣久須麻呂に報へ贈る歌三首」「また家持、藤原朝臣久須麻呂に贈る歌二首」がある。その五首を列

挙する。

大伴宿禰家持が、藤原朝臣久須麻呂に報へ贈る歌三首

春の雨は　いやしき降るに　梅の花　いまだ咲かなく　いと若みかも

（巻四・七八六）

夢のごと　思ほゆるかも　はしきやし　君が使ひの　まねく通へば

（巻四・七八七）

うら若み　花咲き難き　梅を植ゑて　人の言しみ　思ひそ我がする

（巻四・七八八）

また家持が藤原朝臣久須麻呂に贈る歌二首

心ぐく　思ほゆるかも　春霞　たなびく時に　言の通へば

（巻四・七八九）

春風の　音にし出なば　ありさりて　今ならずとも　君がまにまに

（巻四・七九〇）

「新編日本古典文学全集」『萬葉集』はこの歌群を「藤原久須麻呂の家持の娘に対する求婚の歌」とみているが、諸注釈が同様の解釈をとっていることからも、蓋然性は非常に高いと思われる。この歌群で特に注目すべきは七九〇番歌である。阿蘇瑞枝氏は『萬葉集全歌講義』において「「君がまにまに」の表現は集中、本歌例を含めて十三例あり、巻三の市原王の歌、家持の娘への求婚歌を除く他の例は、いずれも作者不明の相聞歌である。」と指摘する。[注16] 市原王の該当歌は下記の通りである。

いなだきに　きすめる玉は　二つなし　かにもかくにも君がまにまに

（巻三・四一二）

家持の歌と似通った、若い同僚に娘を娶ってもらいたいと願うものである。このように、「君がまにまに」を含む歌は遍く恋愛や婚姻に関する歌であり、四五〇五番歌も例外なくこれらに準じた解釈が可能であるといえる。この宴に家持・市原王両人が出席していることから、和歌に含まれる〈婚姻〉の意図を前提として詠まれた可能性が高く、そうでなくとも自作の和歌の表現が浮かぶ状況にあったと想定できる。四五〇五番歌は市原王もしくは家持の当該相聞歌に準じて創作されたものと考えても不自然ではない。

この歌群の後に久須麻呂の返歌が続くが、家持の歌は七九〇番歌以降みられない。清麻呂宅宴席歌群が婚姻を寿ぐ歌群であったと仮定するなら、家持の歌群と同様に、「君がまにまに」で宴席歌群が終るのは意図的だろう。

気にかかるのは、家持・市原王らが自ら作歌している反面、四五〇五番歌の場合は父親の清麻呂ではなく〈大原今城〉が作歌している点である。上記のような背景があったとすれば、四五〇五番歌は清麻呂が詠むのが必至であり違和感が拭えない。

歌群末尾の四五〇五番歌だけでなく、冒頭歌の四四九六番歌も今城の作である。宴の口火を切っていることをみても、この宴に対する今城の関心の高さがうかがえる。なぜ今城は宴に執

心していたのか。次章でその理由を検討する。

二　政治的側面からの検討

十首の中で今城が自作した歌は、四四九六番歌と四五〇五番歌である。四四九六番歌と四五〇五番歌を再掲する。

恨めしく　君はもあるか　やどの梅の　散り過ぐるまで
見しめずありける　（巻二十・四四九六）

磯の裏に　常夜日来住む　鴛鴦の　惜しき我が身は　君が
まにまに　（巻二十・四五〇五）

四四九六番歌が清麻呂女（梅）を寓意した詠歌であるとすれば、「あなたは恨めしい方ですね。娘さんが男性と契るまで、娘さんを私には見せて下さらなかったのですから。」といった意訳ができる。今城がこの宴に積極的だったとすると、歌の表意とは裏腹に今城は清麻呂の娘の婚姻を喜んでいたと解釈できる。清麻呂の返歌も含めると、両人事情を承知の上で戯れの歌を詠んだのだろう。『尊卑分脈』によれば、清麻呂女は藤原巨勢麻呂の子息〈藤原瀧麻呂〉と婚姻したようである。清麻呂の子息〈中臣諸魚〉は七四三年の生まれであり、中臣女郎も七四〇年代前後に誕生したと仮定すれば、宴が催された七五八年には結婚適齢期に相当する。

瀧麻呂の父〈藤原巨勢麻呂〉の出自は藤原南家であり、藤原仲麻呂（恵美押勝）政権のもと兄と共に南家を興隆させたが、七六四年の恵美押勝の乱の際に兄弟共々処刑された。七五八年は仲麻呂が健在であり、巨勢麻呂も乗じて権勢を誇っていた。

巨勢麻呂の子息と清麻呂女が婚姻することは、今城にとって望ましいものであったと推察できる。今城と家持の関係について、木本好信氏は[注17]『万葉時代の人びとと政争』において次のように指摘している。

…（※家持は）天平宝字元年六月に年足が兵部卿に補任されたのと同時に兵部大輔に転任している。このような関係から年足は、仲麻呂政権の成立にあたって政治的に微妙な立場にいた家持を擁護したものと思われる。また、この前後に大原今城との交遊が『万葉集』によって頻繁であることが知られるのも、仲麻呂派の今城をつうじて仲麻呂からの疑惑を払拭する意味があったとも推察できるし、巻二十・四五一四番歌に同年二月「内相の宅に渤海大使小野田守朝臣等に餞する宴の歌」として、紫微内相仲麻呂宅での宴に参加して、披露しなかったとはいえ「青海原　風波なびき　行くさ来さ　障むことなく　船は早けむ」と詠んでいるところに、家持の保身のための心情を推知することができる。…

（傍線は私に付した。引用文献を強調する場合は、以後同様の措置をとる。また、※箇所は、便宜上筆者が独自につけ加えた。）

家持は仲麻呂が持つ疑惑を払拭するため、大原今城と頻繁に接触していたようだ。今城を中立の立場とみる説も多いが、恵美押勝の乱が起る天平宝字八年（七六四）正月七日には仲麻呂（押勝）政権のもと従五位上を授かっている（清麻呂は従四位上を授かる）。対して家持は同年正月二十一日に薩摩守に左遷されており、待遇に差がみえる（宴に同席した甘南備真人伊香は主税頭に昇進）。

その後同年九月十八日に押勝は討伐され、翌年二月五日紀朝臣広純が薩摩守へ任じられたのをもって家持は帰京したと思われる。今城は道鏡が下野国薬師寺へ下った一年後（七七一）に従五位上に復すまで無位であった。[注18]

また、今城と仲麻呂派の親交を示唆する歌群がある。

三月四日に、兵部大丞大原真人今城の宅にして宴する歌一首

あしひきの　八つ峰の椿　つらつらに　見とも飽かめや　植ゑてける君

右、兵部少輔大伴家持、植ゑたる椿を属て作る。

（巻第二十・四四八一）

堀江越え　遠き里まで　送り来る　君が心は　忘らゆましじ

右の一首、播磨介藤原朝臣執弓、任に赴きて別れを悲しぶるなり。主人大原今城伝へ読みて云爾。

（巻第二十・四四八二）

執弓（真先・真光）は仲麻呂の子息で、恵美押勝の乱に際し天平宝字八年九月十八日に射殺された。乱では軍勢を率いて仲麻呂と共に戦っており、仲麻呂派の中枢にいたことがわかる。

阿蘇瑞枝氏が「反仲麻呂派の結集がひそかに企てられている中、仲麻呂との親しさを誇示しているようにも見える。」と指摘するように、[注19]己の立場を模索し関係を深めようとする家持をあしらっているようにも思える。上記を考慮すると、今城は仲麻呂派に深く与しており、それゆえ乱に連座して官位を剥奪された、とみるのが最も道理に合うのではないか。また木本氏は同書内において、〈藤原久須麻呂からの娘に対する求愛事情〉を、以下のように解釈している。[注20]

…このように政治的に拮抗しつつも、畏敬する諸兄とその政権が仲麻呂によって崩壊へと追いつめられつつあることを感じずにはいられないこの時、家持はその仲麻呂の息子である久須麿から娘への求愛を、北山氏のいうように素直に「良縁として悦んだ」とは思えない。無頓着ともいえるこの久須麿の行動に、家持は戸惑いながらも保身ということをも併考して無下にも断ることもできなかったというところが真実であろう。七八七・七九〇番歌にそのような家持の心を推知することができると思う。…

家持は仲麻呂子息の娘への求愛を快諾しなかった。今城とも水面下では緊迫した状況にあったのかもしれない。その影響か、家持はこの宴席において〈梅〉を冠した歌を全く詠んでいない。久須麿と歌を交わした天平十四～十八年頃より数年が経過していたとしても、「橘奈良麻呂の乱（七五七）」の記憶も新しい中で、親しい友人の娘と仲麻呂関係者との婚姻には、思うところがあったのではないか。

対する今城は四五〇五番歌にみえるように、清麻呂の行動を歓迎し相聞に準じる歌を詠んでいる。家持の贈答歌に似せたのは見ようによっては家持への当てつけとも受け取れる。この宴以後の清麻呂の進退はどうであったか。倉本一宏氏は、『藤原氏――権力中枢の一族』において、次のように指摘する。[注21]

（※天平宝字六年）十二月、押勝は乾政官首脳部に大規模な異動を行なった。…（中略）…訓儒麻呂・朝獦といった自己の子息、それに中臣清麻呂・石川豊成といった腹心を、それぞれ任じ、その権力を補強した（『続日本紀』）。…（中略）…押勝の略伝に、「其の他の顕要の官は、婚戚でないものはなかった」と称されているのは、この頃から後のことであった。…

（※箇所は、便宜上筆者が独自につけ加えた。）

結果として、清麻呂女と巨勢麻呂子息との婚姻は清麻呂の出世の足掛かりとなり、数年後に清麻呂は仲麻呂政権下において重役に登用された。清麻呂女と巨勢麻呂子息の婚姻は相応の効力を発揮し、仲麻呂の信用を得たようである。家持が危惧した通りに事態は動いたとみえる。

ところで、当該歌群とそれに続く五首に加え「山斎を属目して作る歌三首」も同時の作であるとする指摘は多い。この歌群で〈三形王〉という人物が歌を詠んでいるのに注目したい。宴の約一年前に三形王の宅で詠まれた四四八三番歌、そして続く四四八四番歌は家持の立場をよく表している。

勝宝九歳六月二十三日に、大堅物三形王の宅にして宴する歌一首

移り行く　時見るごとに　心痛く　昔の人し　思ほゆるかも

右、兵部大輔大伴宿禰家持が作　（巻二十・四四八三）

咲く花は　うつろふ時あり　あしひきの　山菅の根し　長くはありけり

右の一首、大伴宿禰家持、物色の変化ふことを悲しび怜びて作る。　（巻二十・四四八四）

上記の二首は、天平勝宝九歳（七五七）に起こる「橘奈良麻呂の乱」を予見して詠まれた歌である。三形王に関しては、天平勝宝元年四月に従五位下、天平宝字三年六月に従五位上、同年七月に従四位下木工頭へ昇進しており、『万葉集』によれば勝宝九歳（七五七）六月には大堅物の職にあったようだ。[注22]

三形王は『続日本紀』では〈御方王〉とも表記される。宝亀三年（七七二）に無位から従五位下に復した〈三方王〉という人物がおり、三形王とは別人とする説もある。しかし三方王と同時に官位を復した〈宗形王〉は、天平宝字三年六月十六日条に無位から従四位下を、また同時に御方王（三形王）も従四位下を授かったとあり、その理由は「淳仁天皇の父である舎人親王に尊号を賜うに従い、母を大夫人、兄弟姉妹を親王と称し、及びに優遇すべき官人に官位を授ける」というものだった。[注23]

直木孝次郎氏は「二世王の蔭位は従四位下（選叙令35蔭皇親条）。これにより従四位下を授けられた御方王以下の五名は舎人親王（崇神尽敬皇帝）の孫と考えられる。」と指摘する。[注24]直木氏の指摘に鑑みれば、三形王と宗形王は近親者であったと推定できる。同条に親王として三品を授かったと記される船王と池田王は、両者共に恵美押勝の乱に連座していることから、淳仁天皇に近しい人間として三形王・宗形王は処罰されたのではないか。[注25]大原今城が宝亀二年（七七一）三月二十八日に無位から従五位上に復しているほか、多数の人物が前後数年間に復位していることから、三方王や宗形王も同様に恩赦されたと考えられる。

以上を考慮すると、〈三方王〉は表記が異なるだけで〈三形王〉と同一人物である可能性が高い。特に〈宗形王〉と同時期に復している点は〈三方王〉に宗形王と似通った処罰が下されていたことを示唆しており、〈三形王〉との類似性が指摘できる。三形王は恵美押勝の乱で失脚したと見るべきではないだろうか。[注26]不安定な立場であったためか、三形王は宴歌十首、続く五首において歌を詠んでいない。

先に引用した四四八四番歌であるが、四五〇一番歌「八千種の花はうつろふ常盤なる松のさ枝を我は結ばな」と構成が非常に似ている。「新編日本古典文学全集」は「咲く花を一時の栄えのたとえとする例は多いが、ここは、仲麻呂の、朝政を私している現状を憎み、このような悪逆が長く続くはずがない、と呪って言ったもの。」と指摘している。[注27]四五〇一番歌も同様に解釈されていることから、〈咲く花〉及び〈八千種の花〉は〈藤原仲麻呂の専横〉に関係する何らかを指しているといえる。

四四九六番歌・四四九七番歌が植物の梅を褒める歌なのであれば、家持がめでたい宴席でこのような寓意を持つ歌を詠む必要はないため、仲麻呂を勢いづける要因が上記二首にあったと考えるのが自然である。

続いて「山斎を属目して作る歌三首」を引用する。

鴛鴦の棲む　君がこの山斎　今日見れば　あしびの花も
咲きにけるかも

右の一首、大堅物三形王　（巻二十・四五一一）

池水に　影さへ見えて　咲きにほふ　あしびの花を　袖に
扱入れな

右の一首、右中弁大伴宿禰家持　（巻二十・四五一二）

磯影の　見ゆる池水　照るまでに　咲けるあしびの　散ら
まく惜しも

右の一首、大蔵大輔甘南備伊香真人

（巻二十・四五一三）

清麻呂邸の〈山斎〉については飛田範夫氏の「奈良時代までの庭園植栽」に詳しい。[注28]

『万葉集』によれば、奈良時代の海洋風景式の園池は、飛鳥時代の蘇我馬子の場合と同様に「しま」と呼ばれている。天平宝字2年（758）2月に式部省次官であった中臣清麿邸で行われた宴席での作と考えられる歌に、

鴛鴦（オシドリ）の住む君がこの山斎今日見れば馬酔木の花も咲きにけるかも［4511］

とある。他の歌に「君が家の池の白波磯に寄せ」［4503］と詠まれていることから、この「しま」と呼ばれてた庭園には、海岸の荒磯を表現した石組が置かれていたことがわかる。この庭園の植栽だが、別な歌には「磯松」［4498］とあり、類例としては橘諸兄（684-757）邸での歌に「松蔭の清き浜辺に」［4271］とあることから、海辺のマツ林を模して数多くマツを植えていたのではないかと思われる。しかし、マツだけではなくて、中臣邸では先の歌のようにアセビやウメ［4502］なども植えている。…

〈磯〉は海洋風景に見立てた園池を指すが、山斎と呼ばれる庭園のうちに〈磯〉に似せた区域があったようである。海辺の松林を模すため、清麻呂が数多くの松を植えていた可能性が高い。家持が四四九八番歌で〈磯松〉をひいたのはこの為だろう。市原王が四五〇〇番歌で梅の花に話題を戻すも、家持は四五〇一番歌で再び松に話題を変えている。家持の頑なな姿勢を察したのか、四五〇二番歌からは〈磯〉に重きを置いた歌が続く。

話を「山斎を属目して作る歌三首」に戻す。三形王は清麻呂の山斎に咲く〈あしびの花〉を褒め称えている。「あしびの花も」と他の花を念頭に置いて詠んでいるようだが、おそらく前十首で言及のあった咲き散る梅の花を指すと思われる。〈八千種の花〉は「たくさんの花」という意味であるが、前十首で頑なに花を詠まず松や庭園賛美に終始した家持が、四五一二番歌に詠まれたあしびの花に関して饒舌なのは非常に違和感がある。この歌は家持があしびの花を〈八千種の花〉から除外していることを暗に示している。

以上に鑑みると、やはり〈八千種の花〉は清麻呂邸の庭園に咲く植物の花ではなく、仲麻呂に関する事象を寓意しているとみるべきであり、〈梅〉に喩えられた清麻呂女と仲麻呂派子息の婚姻により、清麻呂という実力者を得た仲麻呂派が更に勢いづくことを危惧しての言葉選びだと考えるのが最も蓋然性があると思われる。天平宝字二年時の今城と家持、三形王の関係性や立場が、宴席歌含む一八首から明瞭にうかがえるといえる。

おわりに

以上、「式部大輔中臣清麻呂朝臣が宅にして宴する歌十首」における〈梅〉の新解釈を考察してきた。この宴席歌群にあった違和感は、当時の場に二種の〈梅〉が存在したにもかかわらず、一方にあたる〈清麻呂女〉を指す、という可能性を見落としており、その結果宴の筋や大意、和歌に詠み込まれる場景に齟齬が生じたことに因るものだと筆者は推察する。十首の内には庭植物である梅も読み込まれていたことから、疑問視されることなく〈庭の梅〉や〈主人清麻呂を褒め称える宴〉として通説化したものとみえる。この解釈を元に、新たな観点を加えて十首を意訳し流れを整理したい。また、独自の意訳部分以外は「新編日本古典文学全集」『萬葉集』の意訳を引用した。

恨めしいお方ですね。あなたの娘さんが男性と関係を持つまで（梅の花が散りすぎるまで）、娘さんを私に見せてくださらなかったのは。　（意訳）

右の一首、治部少輔大原今城真人（巻二十・四四九六）

あなたが見たいとおっしゃったならば、いやと申しましょうか。娘が男と関係を持つまで（梅の花が散りすぎるまで）、あなたがいらっしゃらなかったのではないですか。　（意訳）

右の一首、主人中臣清麻呂朝臣　（巻二十・四四九七）

慕わしい、今日の宴の主人は、磯松のように変らずにあってください。今もお見かけしているように。　（「新編全集」）

右の一首、右中弁大伴宿祢家持　（巻二十・四四九八）

あなたがそうおっしゃってくれるなら、天地の神に祈って長寿を願おう。　（「新編全集」）

右の一首、主人中臣清麻呂朝臣　（巻二十・四四九九）

梅の花の香りが慕わしさに、遠く離れていますが、心は絶えずあなたを思っております　（「新編全集」）

右の一首、治部大輔市原王　（巻二十・四五〇〇）

数々の花は色褪せるものです。色を変えない松の木の枝をわれわれは結びましょう。

右の一首、右中弁大伴宿祢家持　（巻二十・四五〇一）

梅の花がちらほら散る春の、長い日ずっと見ても飽きないお庭の磯ですなあ。　（「新編全集」）

右の一首、大蔵大輔甘南備伊香真人　（巻二十・四五〇二）

あなたのお邸の池の白波が磯に寄せるように、しげしげ見ても飽きないあなたですね。　（「新編全集」）

右の一首、右中弁大伴宿祢家持　（巻二十・四五〇三）

素晴しい方だとわたしが思うあなた。もっと毎日でもお出でくださいな　絶える日なしに　（「新編全集」）

右の一首、主人中臣清麻呂朝臣　（巻二十・四五〇四）

磯蔭に夜昼いつも来てすむ、おしどりのその惜しいこの身はあなたにお預けします　（「新編全集」）

右の一首、治部少輔大原今城真人（巻二十・四五〇五）

上記の解釈のうち、特筆すべき点を挙げる。四五〇一番歌で家持は〈梅〉を詠まず更に梅を間接的に否定している。この〈八千種の花〉が清麻呂女〈梅〉を表すとすれば、藤原南家の子息と清麻呂女との婚姻を歓迎していないという家持の内心が読み取れる。反仲麻呂派の家持にとっては親しい清麻呂と藤原氏の結束が強固になるのは避けたいところであり、〈花で結ばれた絆＝婚姻による藤原仲麻呂派との結束〉よりも〈松の枝で結ばれた変わらない個々の永久の絆〉を重要視したいという家持の保身と思惑が現れた、政治的要素を含む歌だと考えられる。[注29]

続く四五〇二番歌は、四五〇一番歌が寓する意図を読み取り、清麻呂への配慮も兼ねて庭の梅を引き合いに出しながら焦点を磯に合わせた。婚姻祝いというめでたい席だったとすれば、家持の歌は場にそぐわない。四五〇三番歌においても、家持は頑なに〈梅〉を詠まない。対して四五〇五番歌は、巨勢麻呂子息と清麻呂女の婚姻によって清麻呂と今城の結束が強固になり、仲麻呂の勢力が更に磐石になる喜びを表していると受取ることができる。

以上、中臣清麻呂宅宴席歌群の新しい解釈を提起・検討した。やはり、梅を寿ぐ歌が続くなかで〈家持が一度も梅を詠まない〉という点は不可解であり、〈散り過ぐる〉と強調された梅が春の風物詩として取りあげられるとも思えない。大伴家持と大原今城の水面下での対立、宴の後の清麻呂の出世（仲麻呂政権下）を考慮しても、前述した解釈が妥当なのではないだろうか。

また本稿二章で指摘した〈政治派閥の対立構造〉に関して、後に続く「興に依りて、おのもおのも高円の離宮処を思ひて作る歌五首」が政治的な批判を含んだ歌群であるのは注目に値する。宴が興じた末にこれら五首が詠まれたとすれば、考察した十首も政治的な意味を持ちえた可能性は高いだろう。宴が連続したものである以上、〈婚姻を寿ぐ宴〉から〈政治歌〉に内容が変化するというのは、前者にも要素の一端があったからだといえる。このような歴史的・政治的観点からも、更なる検討が必要な歌群だと考える。

注

1　この歌群は写本の系統によって「十首」また「十五首」に区分される。本稿では便宜上「十首」の形式を採用する。

2　例として『源氏物語』若菜上「花はみな散りすぎて、なごりかすめる梢の緑緑なる木立…（引用は、校注・訳：阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男「新編日本古典文学全集23」『源氏物語④』（小学館・一九九六年）」が挙げられる。

3　四五〇二番歌「咲き散る」が「ちらほら散る（「新編全集」）」と訳されるように、散りゆく過程にある花の表現である。後注に挙げた「咲き散る」を含む和歌も同様に訳される。なお「咲き散りぬ」のように過去や完了を表

す助動詞がある場合はこの限りではないが、問題の四五〇二番歌は該当しない。

4 小島憲之　木下正俊　東野治之「新編日本古典文学全集9」『萬葉集④』小学館　一九九六年。四五三頁～四五五頁。他に、小島憲之　木下正俊　東野治之「新編日本古典文学全集」『萬葉集①～③』（小学館　一九九四～一九九五年）を、万葉歌を引く際に適宜使用した。

5 伊藤博『萬葉集釋注　十』集英社　一九九八年。七八六頁。

6 「新編日本古典文学全集9」『萬葉集④』四五三頁。

7 実際の序の作者は山上憶良とされているが、吉田宜への書簡の内容に鑑みると、この序から「松浦川に遊ぶ序」に至る歌文が旅人自身の編術として贈られたものとして知られており、旅人はこの時期大宰府に赴任していた事は確かであるので、実作者が憶良であったとしても旅人が類似した環境（もとい宴の設定）にあったことに相違はない。（「新編全集」巻五・八一五番歌、「新編全集」巻八・一六三九番歌の頭注を参考）。

8 「新編全集」『萬葉集』は、「現在、大宰府周辺の梅の満開は普通三月中旬」と注釈しており（『萬葉集②』・四三頁）、更に見ごろの時期が下る可能性がある。

9 「新編日本古典文学全集9」『萬葉集④』三三九頁。

10 改訂新版『世界大百科事典』平凡社　二〇一四年。【ウメ】項に、「萌芽前の2～4月に開花」と記載があり、現在の梅の開花時期は、地域差を考慮しても奈良時代とほぼ変わらないと推測できる。

11 「咲き散る」は「さきち［ら］［り］［る］［れ］」「さきてち［る］［り］」「さきかちる」「さきかもちる」を含む歌、「散り過ぐ」は「ちりす［ぎ］［ぐ］［ぐる］」「ちりてすぎ」「ちりかす［ぎ］［ぐ］」を含む歌を調査した。結果、「咲き散る」は、120、231、400、829、841、1510、1841、1900、1922、1942、1976、2252、2282、2287、2289、3993、4041、4502番各歌。「散り過ぐ」は、816、1489、1554、1557、1599、1651、1684、1747、1749、1834、1973、2152、2286、2290、3333、3779、4395、4496、4497番各歌が該当した。なお「咲く」「散る」が離れている句（対句など）は対象から除外した。

12 「新編日本古典文学全集」『萬葉集』一九〇〇番・頭注に、「「花光」二字を花の照り輝く意に用いることは、六朝詩や唐詩に例を見る。」とあるように、すっかり散ってしまった梅の園を表すには、この表現は不適切である。

13 拙稿「〈花かつみ考〉――『万葉集』六七五番歌の検討――」『学習院大学国語国文学会誌』第六十四号　学習院大学国文学会　二〇二一年三月。

14 黒板勝美・国史大系編修会『尊卑分脈』第2篇　吉川弘文館　四一八頁。

15 「秋さらば　移しもせむと　我が蒔きし　韓藍の花を　誰か摘みけむ（1362番歌）」。韓藍の花は作者が目をつけた女性を指し、行動しない内に他の男性に奪われたことを

暗喩している。

16 阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義』第10巻　笠間書院　二〇一五年。五九一頁。

17 木本好信『万葉時代の人びとと政争』おうふう　二〇〇八年。Ⅰ・大伴家持と平城京の政界〔一・大伴家持と平城京の政界〕三〇、三一頁。

18 官位に関する記述は全て、黒板勝美・国史大系編集会編集「国史大系　第二巻」『續日本紀』（吉川弘文館　一九三五年）による。なお、以後特に注記のない場合、官位や人物の進退に関する事柄の詳細は『續日本紀』の条文に照らしたものとする。

19 阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義』第10巻　五五六、五五七頁。

20 木本好信『万葉時代の人びとと政争』Ⅰ・大伴家持と平城京の政界〔二・大伴家持の娘〕、七〇頁。

21 倉本一宏『藤原氏――権力中枢の一族』中央公論新社二〇一七年。一一四、一一五頁。

22 『萬葉集』四四八三番歌題詞より。

23 『續日本紀』天平宝字三年六月十六日条より。二六二頁。

24 直木孝次郎『続日本紀3』平凡社　一九九〇年。「巻第二十二」注一九　五七頁より。

25 『續日本紀』天平宝字元年七月二十七日条に、「塩焼王者唯預四王之列。然不会謀庭。亦不被告。而縁道祖王者應配遠流罪。然其父新田部親王以清明心仕奉親王也。可絶其家門夜止為奈母此般罪免給。（旧字体は筆者が新字体に改めた）」と記述がある（実際は父の功績をもって恩赦）。よって舎人親王の孫であり廃帝淳仁の甥と目される三形王が罪に問われ縁坐した可能性は高いと思われる。ちなみに『律令』（井上光貞・関晃・土田直鎮・青木和夫「日本思想大系3」岩波書店　一九七六年）によると「反逆縁坐流（謀反大逆犯の祖孫兄弟が処せられる遠流（賊盗1））は除名・配流処分（名例律第一11）」に値する（恩赦が下る場合も除名は免れない（名例律第一18））。

26 『續日本紀』延暦元年閏正月十八日条・同年正月十九日条において、三方王と家持が氷上川継の謀反に関与したとして連座した旨が記される。この乱は「皇位継承に絡む藤原式家の政治的陰謀によって起こったもの（『日本大百科全書』【氷上川継】項）」とも目されるため、三方王は家持と同じく藤原氏に不穏分子として認識されていた可能性がある。また延暦元年三月二十六日条には「天皇を呪詛した罪で弓削女王（三方王妻）を三方王と共に日向国に流した」とあるが、弓削女王は三方王と同じく舎人親王の孫であり、年齢や縁戚関係を考慮すれば三形王と三方王を同一人物とみなす傍証になりうると思われる。

27 「新編全集」『萬葉集④』四四八四番歌頭注。四四七頁。

28 飛田範夫「奈良時代までの庭園植栽」『ランドスケープ研究：日本造園学会誌　62巻1号』日本造園学会　一九九八年八月。六一頁。

29

四五〇一番歌の不自然さに関しては、阿蘇瑞枝氏が「初めの十首のうちの客の歌のほとんどが、主人清麻呂を賞めるか、清麻呂の邸の庭園を賞めるかであるのに対して、「八千種の花」を退け、「ときはなる松のさ枝をわれは結ばな」と全体の空気にそぐわない歌を詠んでいる。続く伊香真人が、四五〇二で、清麻呂の庭園を、「長き日を見れども飽かぬ磯にもあるかも」と詠んだので、家持もふたたび清麻呂を讃美する歌、四五〇三を詠んでいるが、松のさ枝の歌が浮き上がっている感は否めない。（『萬葉集全歌講義』第10巻　五八八頁。）」と指摘している。